

平成 27 年度

**和歌山信愛女子短期大学
自己点検・評価報告書**

平成 28 年 1 月

2 【基準 I 建学の精神と教育の効果】

[テーマ 基準 I-A 建学の精神]

[区分 基準 I-A-1 建学の精神が確立している。]

(a) 自己点検・評価を基に現状を記述する

(1) 建学の精神は短期大学の教育理念・理想を明確に示している。

本学の建学の精神は、「ショファイユの幼きイエズス修道会」の創立者レーヌ・アンティエの「マリアにおいて幼子となられた神の愛の秘儀を世に示すために、愛と信頼をもって神と人々のために生きる人を教育する」という教育理念に基づき、学院標語（モットー）を「一つの心、一つの魂」として、信愛教育五つの柱を立てている。

1. キリストの教えに根ざした教育
2. 一人ひとりを大切にする教育
3. 能力の開発を目指す教育
4. 自己形成を促す教育
5. 社会貢献への態度を形成する教育

(I-A-1-1、I-A-1-2)

(2) 建学の精神を学内外に表明している。

この標語と五つの柱について、学外には「ショファイユの幼きイエズス修道会」(I-A-1-2)と本学のホームページ(I-A-1-3)の「大学案内」の「建学の精神」において説明し、更に、「教育三方針」(I-A-1-4)を情報公開している。学内において、学生には「学校案内」(I-A-1-5)や「学生生活のてびき」(I-A-1-6)に記載し、新入生オリエンテーション等において周知徹底を図っている。

(3) 建学の精神を学内において共有している。

この建学の精神の理解と浸透に向けた活動は、学生と教職員を対象とした「チャペルアワー」(年間15回)における講話及び年3回のミサ(聖母祭、追悼祭、クリスマス)と、成人式を祝うみ言葉の祭儀等の宗教行事への参加によって図られてきた。

(4) 建学の精神を定期的に確認している。

しかし、2013年と2014年に実施した学生生活調査の結果からは、厳しい現状を指摘されるに至った。そこで、この現状を詳しく知るため、建学の精神に関連する項目として、問8「知識・意欲・態度は在学中にどのように変化しましたか」の「8. キリスト教的倫理観」と「15. 自分に対する自信」(第2の柱「一人ひとりを大切にする教育」との関連)に着目し、2013年度卒業生(165名)と1年生(210名)及び、2014年度卒業生(196名)を対象とするデータの比較を試みた。

問(項目)	8. 「キリスト教的倫理感」			15. 「自分に対する自信」		
	上達した	変化なし	低下した	上達した	変化なし	低下した
2013 卒業	29.7	62.4	6.7	45.5	47.9	5.5
2013 一年	34.0	60.8	5.3	34.3	58.0	7.7
2014 卒業	42.8	52.1	5.2	48.4	47.4	4.2

非常に小さいデータで限界はあるが、少なくとも2点のことは明確である。第1に、両年度の卒業生の数値を単純比較すると、わずかながら2項目とも「上達した」が増加(8:29.7→42.8・15:45.5→48.4)、「低下した」もわずかながら減少しており(8:6.7→5.2・15:5.5→4.2)、レーダーチャートでの評価方法(3点満点)でも上昇しており(8:2.13→2.38、9:2.38→2.44)、教育的な成果が認められた。第2に、2013年入学生の1年終了時と卒業時との比較においても、先と同様に伸び(8:2.29→2.38、9:2.27→2.44)が確認される点が指摘できる。これらの向上は共に微少ではあるが、今後の教育活動に希望や可能性があることを示すデータとして重視したい。

しかし、この確認に立ってなお、厳しい現状に変わりはない。よって、本年度からは、平成25年および26年双方の「自己点検・評価」の課題への対応として、以下の具体的な対策をもって改善を開始した。

まず、2年生の「チャペルアワーⅡ」(I-A-1-7)を45分演習の隔週通年とし、従来の前期終了の形式を変更した。一方、1年生は「信愛教育Ⅰ」(I-A-1-8)を「チャペルアワーⅠ」に代え、45分演習で毎週実施している。また、学内のチャペルにて、全クラスが年に1度クラスミサにあずかる機会を設けた。この時間が、祈ること、静けさの中にある心地よさを知り、自他を深く見つめ、建学の精神を学ぶ契機となるように試行錯誤を続けている。また、この礼拝を学生主体で行えるよう、すべての役割(I-A-1-9)を学生が果たすこととして、学生が能動的かつ主体的に宗教行事への参加を可能としたい。さらに、一人でも多くの学生にリーダーシップを発揮する場を提供することによって、「自分に対する自信」(学生生活調査問/15「自分に対する自信」)を培うことをも目指している。

なお、全学ミサだけでなく、このクラスミサにも、教職員は参加し建学の精神の理解に努めている。また、両授業が演習であることから、教職員も共にあずかるクラス別学長講話(I-A-1-10)をはじめ、ミサに向けた聖歌の練習、生命の尊さに関する講話などの実施も可能となった。

講話内容	実施月	学年	テーマ
学長講話	4月	全1年(クラス単位)	祈りについて
〃	7月	全1年(クラス単位)	建学の精神Ⅰ
〃	10月	全1年(クラス単位)	建学の精神Ⅱ
〃	1月予定	全2年(クラス単位)	卒業を控えて
外部講師	10月	全2年(クラス単位)	いのちの話し

次に、5月の全学ミサ(聖母祭)についても、学生主体で行い無事終了することができた。クラスや学科の隔たりを少しずつ越え、皆がひとつになること(本学のモットー：一つの心一つの魂)を期待しつつ、ミサに向けた委員会(聖母・総務・体育委員)活動の活性化を試みている(I-A-1-11)。なお、聖母祭ミサでは、ネパール地震災害への献金を募り、祈りと共に奉納した。

その他の活動としては、聖句の紹介と宗教的雰囲気を作るために、み言葉を記した手作りのポスターを月ごとに学内に掲示している。また、10月は、「ロザリオの月」であるため、昼休みを用い「ロザリオの祈りの集い」(I-A-1-12)への参加を呼び掛けている。

(b) 課題

2016年度より、「チャペルアワーⅡ」を閉講し、「信愛教育Ⅰ・Ⅱ」が始まる。これらの授業が、学生に建学の精神を伝え、各自の生き方の参考になるように充実するためには、常にシラバスを検討し、創意工夫をもって授業を行う必要がある。

また、宗教行事が学生主体で充実できるよう、委員会の活動を組織化し、活性化することも大切である。特に、全学ミサは学年と学科を超える行事であるが、準備時間の確保も難しく、また、活動を開始したばかりで、委員一人ひとりの意識もまだ高まってはいないため、核となるリーダーの育成が急を要する課題である。今後は、各科・クラスの連携を築き、強化して活動の定着を図りたい。

祈りの集いへの関心、苦しむ人々との連帯としての献金活動等に対する意識・反応はまだまだ活発とは言えないが、建学の精神を実践的に学ぶ良い機会として、粘り強く充実に向け努力する必要がある。

資料

- I-A-1-1 幼きイエズス修道会冊子『信愛教育』
- I-A-1-2 ショファイユの幼きイエズス修道会、教育、www.osanaki-iezusu.or.jp
- I-A-1-3 和歌山信愛女子短期大学、大学案内、建学の精神 www.shinai-u.ac.jp/
- I-A-1-4 和歌山信愛女子短期大学・附属中学校・高等学校・幼稚園創立50周年記念誌
- I-A-1-5 大学案内
- I-A-1-6 学生生活のてびき
- I-A-1-7 平成27年度シラバス(2年用)
- I-A-1-8 平成27年度シラバス(1年用)
- I-A-1-9 クラスミサ計画表
- I-A-1-10 学長講話(信愛教育Ⅰ)聴講希望日時調査
- I-A-1-11 全学聖母・総務委員合同伝達会(配布プリント)
- I-A-1-12 創立記念・ロザリオの月ポスター

[テーマ 基準Ⅰ-B 教育の効果]

[区分 基準Ⅰ-B-1 教育目的・目標が確立している。]

基準Ⅰ-B-1の自己点検・評価

(a) 現状

(1) 学科・専攻課程の教育目的・目標を建学の精神に基づき明確に示している。

学科・専攻課程の教育目的・目標は、本学の建学の精神である、「信愛教育理念」(1. キリストの教えに根ざした教育、2. 一人ひとりを大切にす教育、3. 能力の開発を目指す教育、4. 自己形成を促す教育、5. 社会貢献への態度を形成する教育)に基づき、人間教育、職業人教育、社会人教育の3つの柱からなっている(幼きイエズス修道会 信愛教育冊子)。

各科・専攻の教育目的・目標は以下の通りである(学則)。

【保育科】

「愛と奉仕の精神を基盤とする人間形成に努め、現代社会に適応する保育の知識と技術を有する専門保育者の養成」

【生活文化学科生活文化専攻】

「生活に関わる幅広い知識と技能を養い、感性豊かで創造的なデザイン力を培い、地域と社会に貢献できる自立性を有する人材育成」

【生活文化学科食物栄養専攻】

「食生活を通して人々の健康を維持・増進することに貢献できる専門の知識と技術を兼ね備えた栄養士の養成」

(2) 学科・専攻課程の教育目的・目標を学内外に表明している。

学科・専攻における教育目的は、学則第5条に定められており、「ホームページ」、「学生募集要項」にて学内外に表明されている（学則、ホームページ、学生募集要項）。学生には、学生生活のてびき、カリキュラムマップに記載し、新入生オリエンテーション、2年生オリエンテーション、合宿研修、フレッシュマンキャンプで周知徹底している（学生生活のてびき、カリキュラムマップ、新入生オリエンテーション資料、オリエンテーション資料（新入生・2年生）、合宿研修資料、フレッシュマンキャンプ資料）。

また、保護者には、入学式後に開催される保護者説明会で周知している（保護者説明会資料）。

(3) 学科・専攻課程の教育目的・目標を定期的に点検している。

本年度は、運営会議を中心に、学科・専攻の教育目的・目標の表現を見直す作業を行っている（運営会議規程、運営会議議事録）。改善目標は、教育目的・目標の表現を、学生が修得すべき学習成果を含む内容に改めることとしている。まずは、運営会議が招集する作業部会で大枠を検討し、運営会議の了承を得た上で、科・専攻会議で具体案を作成する計画である（科・専攻会議議事録）。今年度10月より改正案の検討を行い、来年度9月には決定する予定である。

科・専攻会議で検討された改正案は、運営会議で再度検討される。学長は運営会議で再検討した改正案について審議するため、教授会を招集する（学則 教授会規程）。教授会は、運営会議より提案された改正案を審議し、学長に最終案を提案する。学長は教授会の提案を軸に検討を行い、最終決定を行う流れとなっている。

改正後の評価は、自己点検・評価委員会で毎年行われる（自己点検・評価委員会規程、自己点検・評価委員会議事録）。自己点検・評価委員会で見いだされた課題は、学長に報告され、学長は運営会議を招集して、改善計画を策定すると共に、教授会、学科・専攻会議、各種委員会に実行計画を提案することとなっている（平成27年5月20日全体会議資料：和歌山信愛女子短期大学PDCAサイクル）。

[区分 基準 I-B-2 学習成果を定めている。]

基準 I-B-2 の自己点検・評価

(1) 学科・専攻課程の学習成果を建学の精神に基づき明確に示している。

本学では、「愛と信頼をもって神と人々のために生きる人を教育する」という教育理念に基づき、「人間としての力」{キリスト教の教えを背景とした倫理観（態度・志向性）、教養・知性（知識・理解）、汎用的技能}、「職業人としての力」（専門的知識・理解・技能、統合的な学習経験と創造的な思考力）、「社会人としての力」（態度・志向性）」を学習成果としている。

- (2) 学科・専攻課程の学習成果を学科・専攻課程の教育目的・目標に基づいて明確に示している。

【保育科】

保育士・幼稚園教諭といった、専門保育者の養成を教育目的としている。そのため、以下の学習成果を定めている。①人間としての「キリスト教的倫理観、知識・理解、コミュニケーションスキル、数量的スキル・情報リテラシー、論理的思考力・問題解決力、自己管理能力」、②職業人としての「教育的愛情、子ども理解、保育の指導力、社会性、統合的な学習経験と創造的思考力」、③社会人としての「社会的責任・チームワーク・リーダーシップ・生涯学習力」

【生活文化科生活文化専攻】

地域と社会に貢献できる自立性を有する人材育成を教育目的としている。そのため、以下の学習成果を定めている。①人間としての「前掲保育科と同じ」、②職業人としての「感性豊かで創造的なデザイン力、情報に関する知識と技能、生活と職業に関する幅広い知識と技能、文化と社会に関わる専門的知識、医療・介護・福祉に関わる専門的知識と技能、統合的な学習経験と創造的思考力」、③社会人としての「前掲保育科と同じ」

【生活文化科食物栄養専攻の学習成果】

専門的知識と技術を兼ね備えた栄養士の養成を教育目的としている。そのため、以下の学習成果を定めている。①人間としての「前掲保育科と同じ」、②職業人としての「社会生活と健康に関する知識、人体の構造と機能に関する知識と技能、食品と衛生に関する知識と技能、栄養と健康に関する知識と技能、栄養の指導に関する知識と技能、給食の運営に関する知識と技能、統合的な学習経験と創造的思考力」、③社会人としての「前掲保育科と同じ」

- (3) 学科・専攻課程の学習成果を量的・質的データとして測定する仕組みを持っている。

各科・専攻の学習成果は以下の通りである（カリキュラムマップ）。

学科・専攻課程の学習成果を量的・質的データとして測定する仕組みとして、「学生生活調査」がある（学生生活調査結果）。毎年、1年修了時と2年修了時に、全学生を対象としたアンケート調査を行い、その集計結果を全教職員で共有している。また、成績と各教科における学習成果配分を基に、量的ならびに視覚的に学生の学習成果の達成度がわかるシステムを教務部（教務委員会・FD委員会）が中心となって検討・開発している（学習成果チャート図、平成27年度教務・FD委員会議事録）。本システムは、平成28年度前期から導入する予定である。

さらに、2年次に開講される「卒業研究Ⅱ（保育科）、生活文化ゼミ（生活文化学科生活文化専攻）、卒業研究（生活文化学科食物栄養専攻）」において、卒業論文の提出を課しており、統合的な学習成果を測定する仕組みとなっている（学生論集）。加えて、FD研修会を通じて、本科目のルーブリックを作成し、学習成果の把握に役立てている（卒業研究・生活文化ゼミルーブリック）。

この他、「資格・免許取得率」「就職率（全体と専門職就職率）」「単位履修状況」「GPA(Grade Point Average)」「各授業科目の成績評価」によって学習成果を量的・質的データとして把握している（資格取得状況一覧、内定者一覧、単位履修状況表、GPA一覧、平成27年度）。また、学期末に実施する学生による「授業評価アンケート」によって、学生自身が各授業科目の学習目標達成度を自己評価する仕組みも整備されている（授業評価アンケート用紙及び集計結果）

上記に加え、科・専攻では以下のようにして、学習成果を測定・把握している。

【保育科】

独自の仕組みとしては、「履修カルテ」がある（保育科履修カルテ）。「履修カルテ」は、入学直後、1年次修了時および、2年前期修了時に、学生自身が、学習成果到達度への自己評価を行うと共に、成績を基に到達状況を教員が評価するシステムである。学生自身が学習成果の到達状況を把握でき、学習の動機付けとして活用すると共に、教員による学生指導にも役立っている。

【生活文化学科生活文化専攻】

独自の仕組みとしては、1年次に開講される「インターンシップⅡ」における、地元企業・公共機関からの評価がある（インターンシップ評価表）。将来の就職先となりうるインターンシップ先からの直接評価により、学生および教員が、学習成果到達状況を早期に把握できる仕組みとなっている。

【生活文化学科食物栄養専攻】

独自の仕組みとして、2年次後期に全学生を対象として行う「栄養士実力認定試験」がある（栄養士実力認定試験資料）。全国統一の試験を実施することで、学生の学習成果到達状況を客観的に測定・把握できる仕組みとなっている。

(4) 学科・専攻課程の学習成果を学内外に表明している。

科・専攻の学習成果である資格取得率、就職率、教育活動は、「ホームページ」、「大学案内」「オープンキャンパス」「愛友会(同窓会)誌」「きょう育の和センター通信(仮称)」等で広く学内外に表明している{ホームページ、大学案内、オープンキャンパス配付資料、愛友会誌)、きょう育の和センター通信}。また、保育科では、音楽学習発表会、卒業研究発表会で、生活文化学科生活文化専攻では、ファッションブライダル発表会、生活文化学科食物栄養専攻では、給食管理実習Ⅱにおける学生・教職員への給食提供により学内外に公表している(音楽学習発表会のご案内・プログラム、卒業研究発表会資料、ファッションブライダル発表会資料、給食管理実習資料)。

(5) 学科・専攻課程の学習成果を定期的に点検している。

学習成果の定期的な点検として、毎年3月に開催される単位認定のための教授会がある。本教授会では、科・専攻の学年・クラスごとに、学生の単位修得状況、資格・免許取得者数がクラス担任から報告され、学習成果を定期的に点検できる仕組みとなっている(単位認定のための教授会資料)。また、学期毎に学生の成績は各クラス担任に報告されると共に、問題がある場合には担任を通じて科・専攻会議に報告され、教員間で共有されている(各クラス成績一覧、科・専攻会議議事録)。さらに、キャリアセンターからは、就職活動が始まる前期末から就職内定状況が定期的に教授会で報告されると共に、事務室掲示板に掲示され、随時点検できる体制が整えられている(就職内定状況)。

[区分 基準Ⅰ-B-3 教育の質を保証している。]

基準Ⅰ-B-3の自己点検・評価

(1) 学校教育法、短期大学設置基準等の関係法令の変更などを適宜確認し、法令順守に努めている。

本学は、各学科・専攻において多様な免許・資格課程を有しているため、教務部を中心に、文部科学省及び厚生労働省からの通達、学校教育法、短期大学設置基準等の関係法令の変更を適宜確認し、法令順守に努めている。また、日本私立短期大学協会の教務研修会等には、積極的に参加して情報を得るとともに法令変更を確認し、教育課程の再編等に反映している（出張報告書）。さらに、各関連官庁からの法改正等による通達および事務連絡を、教務部のみならず、学長、副学長、学科長、専攻主任に回覧し、絶えず確認・情報の共有化を図っている（文部科学省・厚生労働省通達）。

(2) 学習成果を焦点とする査定（アセスメント）の手法を有している。

学習成果の達成状況について、機関(大学)・教育課程(学科・専攻)・授業科目ごとに学習成果を査定する方法を有している。大学、学科・専攻、教職員は、それぞれのレベルでの学習成果の査定結果を評価分析し、課題の発見、改善計画策定と実施することにより、教育の向上・充実を目指している。

【機関(大学)】

1年次修了時と2年次卒業式直前に実施される学生生活調査から、学習成果の達成状況を査定している（学生生活調査）。

【教育課程(学科・専攻)】

資格・免許の取得状況(保育士・幼稚園教諭・栄養士・秘書士・情報処理士等)・単位履修状況・GPA、就職実績(特に資格・免許を活かした専門職就職率)から学習成果の達成状況を査定している。また、授業科目の成績と各教科における学習成果配分を基に、量的ならびに視覚的に学習成果の総合的な達成度がわかるシステムを教務部（教務委員会・FD委員会）が中心となって検討・開発している（学習成果チャート図、平成27年度教務・FD委員会議事録）。本システムは、平成28年度前期から導入する予定である。また、各科・専攻では以下のようにして個々に学習成果の査定を行っている。

保 育 科 ：履修カルテにより、入学直後、1年次終了時点及び、2年前期終了時点での学習成果の達成状況を査定し、学習支援に役立てている。

生活文化専攻：インターンシップⅡの地元企業・公共機関の職場体験において、就職候補先から学生への評価を受けており、その結果を基に学習成果の達成状況を早期に把握し、学習支援に役立てている。

食物栄養専攻：2年次後期に全国共通の「栄養士実力認定試験」を実施し、学生の学習成果達成度の客観的査定に努めている。

【授業科目】

科目の成績と、シラバスで示された科目の学習目標の達成度に対する学生による授業評価アンケートの結果から、学習成果の達成状況を査定する。

(3) 教育の向上・充実のためのPDCAサイクルを有している。

教育の向上・充実のためのPDCAサイクル(Plan→Do→Check→Action)は、以下のように機関(大学)、教育課程(各科・専攻)、授業科目(教科担当者)のレベルで実行されている(平成27年5月20日全体会議資料：和歌山信愛女子短期大学PDCAサイクル)。

Plan:

【機関】

- ①本学の建学の精神、教育目的、学位授与の方針（ディプロマポリシー、DP）に基づき、自己点検・評価委員会の報告を参考に、理事長・学長は中長期的な改善計画の策定を理事会・運営会議に諮問し、決定する（理事会議事録・運営会議議事録）。
- ②学長は、改善計画に基づく実行計画策定を、教授会の審議を経て教務部（教務委員会・FD委員会）に諮問する（教授会議事録）。
- ③教務部（教務委員会・FD委員会）は、当該年度の実行計画案を策定し、教授会の審議を経て学長に提案する（教務・FD委員会議事録、教授会議事録）
- ④学長は提案された内容を元に、運営会議で検討し、当該年度の実行計画を策定する（運営会議議事録）。

【教育課程】

- ①教育課程編成の方針(カリキュラムポリシー CP)に基づき、教育課程を編成し、カリキュラムマップにまとめる（カリキュラムマップ）。
- ②保育科では、教職課程委員会が中心となり、教員養成課程を編成し、履修カルテの作成・活用や保育・教職実践演習を中心とした実行計画を立てる（教職課程委員会議事録）。

【教科担当者】

- ①1月に次年度の授業計画を作成し、シラバスとして提出する（シラバス）。

Do:

【機関⇔教育課程】

- ①教務部（教務委員会・FD委員会）は、当該年度の実行計画に基づき、教育改善活動を行う。平成27年度は、「わかりやすい学びづくり」を目標に、各科目が担う学習成果とその配分の見直し、科目のナンバリングとカリキュラムツリーの作成、FD研修会（全2回）、授業の相互参観、学習成果可視化システムの検討・開発を行った（教務・FD委員会会議議事録、平成28年度カリキュラムマップ、科目ナンバリング一覧、カリキュラムツリー、FD研修会資料、相互参観資料、学習成果チャート図）。
- ②学習成果の見直し・科目のナンバリング・カリキュラムツリーの作成については、教務部が立てた案を、各科教務・FD委員を通じて、科・専攻会議（教務・FD委員会議事録）に提案し、議論通じて教育改善に役立てる。

【教育課程】

- ①科・専攻会議を中心に、教育活動を推進する。

【教科担当】

- ①シラバスに沿って授業を実施する。学生の受講状況や、FD研修会、授業の相互参観等を受け、随時修正しながら教育の向上を図る。

Check:

【機関】

- ①教務部が中心となり、1年次修了時と2年卒業時に学生生活調査を実施する。また、各学年学期末（前期は授業の最終回、後期は授業の11回目前後）に学生による授業評価アンケートを実施する。さらに、キャリアセンターが2年生の就職内定状況（内定率・専門職就職率）を教授会で報告すると共に事務室に掲示する。
- ②学生生活調査の結果及び就職内定状況を自己点検・評価委員会が点検・評価し、次年度の課題と改善案をとりまとめ、報告書として学長に提出する（自己点検・評価報告書）。

【教育課程⇔機関】

- ①前後期の成績発表の結果及び3月の単位認定のための教授会で報告される単位修得状況、免許・資格の取得状況から、教育の効果を評価している（成績一覧、単位認定のための教授会資料）。
- ②さらに、下記の学外実習の結果を科・専攻会議で共有し、評価・改善に役立てている。保育科では、教育実習（1年次11月と2年次6月）と保育実習（1年次2～3月と2年次8～9月）、生活文化学科生活文化専攻では、インターンシップ（1年次）、食物栄養専攻では、給食管理実習と医療秘書実務実習（2年次8～9月）が該当する（実習・インターンシップ評価表）。
- ③科・専攻の査定結果と課題は自己点検・評価委員会に報告され、報告書として学長に提出される。

【教科担当⇔機関】

- ①学生による授業評価アンケート、授業参観、学生の成績を分析し、自身の課題をまとめ、報告書として教務部に提出する。
- ②自己点検・評価委員会は教務部の報告を受け、教員個人による教育の効果を評価し、報告書としてまとめ、学長に提出する。

Action

【機関⇔教育課程】

- ①自己点検・評価委員会の報告を受け、理事長・学長は、改善計画の策定を理事会、運営会議、教授会、各部・委員会、科・専攻会議に諮問する。
- ②理事会、運営会議、教授会、各部・委員会、科・専攻会議は改善案を作成し、学長に提案する。
- ③学長は、提案された内容を元に、次年度の教育目標と改善計画を決定、学内外に公表する。

【教育課程】

- ①教務委員会・教職課程委員会が中心となって、教育課程の見直し及び改善案の提言がなされる。
- ②科・専攻会議は教務委員会・教職課程委員会の起案を受け、内容を検討し、次年度の改善計画及びカリキュラムマップを策定する。

【教科担当者】

- ①学生による授業評価アンケート、授業参観、学生の成績等から見いだされた自身課題に対する具体的改善策を立案し、教務部に報告する。また、科・専攻会議で決定されたカリキュラムマップと自身の改善策に基づき、次年度のシラバスを作成し、教務部に提出する。
- ②提出された全シラバスは教務部教務委員の審査を受ける。

3 【基準Ⅱ 教育課程と学生支援】

[テーマ 基準Ⅱ-A 教育課程]

[区分 基準Ⅱ-A-3 入学者受け入れの方針を明確に示している。]

基準Ⅱ-A-3 の自己点検・評価

(a) 現状

(1) 各学科・専攻課程の学習成果に対応する入学者受け入れの方針を示している。

本学は、人間・職業人・社会人として必要な知識や資質を身につけた人材を育てることを目指したディプロマ・ポリシーの方針を基に、各学科・専攻が求める学生像をアドミッション・ポリシーとして明確にし、主に学生募集要項・大学ホームページに明記して入学希望者に示している。

(2) 入学者受け入れの方針は、入学前の学習成果の把握・評価を明確に示している。

(3) 入学者選抜の方法（推薦、一般、A0 選抜等）は、入学者受け入れの方針に対応している。

この入学者受け入れの方針に対応した入学者選抜の方法として、指定校推薦入学選考・推薦入学選考・A0 入学選考・試験入学選考・大学入試センター試験利用入学選考が設けられている（学生募集要項）。

各学科専攻の入学者受け入れの方針は以下の通りである。

【保育科】

- ①豊かな感性を持ち、子どもが好きで、人のために役立ちたいという熱意のある人
- ②基礎学力を備え、幼稚園教諭・保育士になるために意欲的に努力できる人
- ③鍵盤楽器の演奏能力がある人、保育に活かせる特技を持っている人、またはそれらを身に付ける意欲のある人
- ④多様な世代の人々と、良好な人間関係を築くことができる社会性のある人
- ⑤基本的な生活習慣や、マナーが身に付いている人

入学者受け入れの方針は、保育者養成を目指す保育科のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの方針に対応している。そのため、保育者になるための素養として把握・評価しておきたい入学前の学習成果も示されている。入学前の学習成果を把握・評価するために、各入学選考では以下の選考方法を実施している。特に、幼稚園教諭・保育士養成修学のために必要な基礎技術の一つであるピアノ演奏技術は、推薦・試験入学選考において「基礎技能テスト」を実施し判定している。また、音楽分野あるいは体育分野に優れている者を対象に A0 入試を実施し、受け入れ方針に適合した学生の確保に努めている。

入学選考	選考方法
指定校推薦入学選考	調査書 面接
推薦入学選考	調査書 面接 小論文または自己アピール作文 音楽基礎技能テスト
A0 入学選考	調査書 エントリーシート 面接 基礎技能テスト（ピアノ演奏・基礎体力の評価）

試験入学選考	調査書 面接 筆記試験 音楽基礎技能テスト
大学入試センター試験利用入学選考	大学入試センター試験の結果（国語または英語）

【生活文化学科生活文化専攻】

- ①身近な生活（衣・食・住）や文化、デザインに関心のある人
- ②入学後の学習に必要な基礎学力と問題意識を十分に持ち、本専攻が掲げる5系列（ライフデザイン、情報、キャリア、文化と社会、医療・介護・福祉）の学問に取り組むことができる人
- ③基本的なマナーと自己管理能力を有し、これからの社会を生きていく上で重要な力となる「医療事務」、「情報処理士」、「秘書士」などの資格を積極的に取得し、地域社会で幅広く活躍するために努力できる人
- ④クラブ活動、地域活動、社会活動などで積極的に自分の個性を伸ばしたいという明確な目的意識を持った人

入学者受け入れの方針は、「ライフデザイン」、「情報」、「キャリア」、「文化と社会」、「医療・介護・福祉」の分野で活躍する人材育成を目指す生活文化専攻のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの方針に対応している。そのため、入学までの学習経験や活動、学習への意欲の把握・評価を重視した内容となっている。各入学選考では以下の選考方法を実施している。特に、A0入試においては面接を重視し、アドミッション・ポリシーに対応した志望動機、進路意識、学習意欲に関する質問により受験生の適性を把握し、入学受け入れ可能な人物であるかの確認を行っている。

入学選考	選考方法
指定校推薦入学選考	調査書 面接
推薦入学選考	調査書 面接 小論文または自己アピール作文
A0入学選考	調査書 エントリーシート 面接
試験入学選考	調査書 面接 筆記試験
大学入試センター試験利用入学選考	大学入試センター試験の結果（国語または英語）

【生活文化学科食物栄養専攻】

- ①人の痛みや苦しみに共感でき、感謝の心を持つ人間性豊かな人
- ②生物や化学に関心があり、食や健康について科学的に考えることができる人
- ③料理を作ることが好きで、栄養士になるために努力できる人

④人との関わりを大切にし、コミュニケーション能力と協調性のある人

⑤食の専門的な知識と技能を活かし、社会に貢献したい人

入学者受け入れの方針は、栄養士養成を目指す食物栄養専攻のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの方針に対応している。そのために、各入学選考では以下の選抜方法を実施しているが、栄養士を希望する生徒に対しては、栄養士の適合性として重視していた基礎学力などの項目を見直し、まず志望動機の適合性と学習意欲、さらにコミュニケーション能力やメンタル面での適応性等を中心に把握・評価項目とする改善を行った。また、基礎学力の項目についての確認も書類審査だけではなく、面接を通しての見極めも行うことにより、栄養士となる素養についての的確な評価をするようにしている。各入学選考で行われる面接では、本専攻教員が受験生の適正を把握し、アドミッション・ポリシーに対応した、志望動機、進路意識、学習意欲に関する質問、栄養士として必要な基礎学力（数学、化学、生物）の適合性、簡単な実技を対話形式で行い、入学受け入れ可能な人物であるかの確認を行っている。

入学選考	選考方法
指定校推薦入学選考	調査書 面接
推薦入学選考	調査書 面接 小論文または自己アピール作文
A0 入学選考	調査書 エントリーシート 面接と対話による基礎学力、実技の評価
試験入学選考	調査書 面接 筆記試験
大学入試センター試験利用入学選考	大学入試センター試験の結果（国語または英語）

(b) 自己点検・評価を基に課題を記述する

入学者受け入れの方針は、本学を志願する高校生にある程度は周知されているものと考えられるが、募集要項、大学ホームページのみの閲覧によって理解されているか否かは引き続き定期的に点検していく必要がある。また、今年度は大学案内の内容を大幅にリニューアルしたが、それが高校生にとってわかりやすいものであったかどうかを検証した上で、次年度の大学案内に反映させる予定である。

入学者受け入れの方針に基づく入学前の学習成果の把握・評価の方法については、各学科専攻において特に面接によつて的確に把握することに努めてきたが、それによって成果が得られたかどうかの検証をする必要がある。また、試験選考の筆記試験科目について、本学が求める学生の基礎学力をより明確にするために国語のみとして今年度は実施（昨年度までは国語・英語の2科目）するが、それが高校生にどのように影響したか、また基礎学力の把握に資したか否かを検証した上で、次年度の試験科目、選考方法の見直しに反映させる予定である。

また、保育科においては選考でピアノ実技を課すことについて、その意義や必要性が高校

生ならびに高校教員、保護者に誤解なく伝えられたか否かを検証する必要がある。幼稚園教諭や保育士の資質について、ピアノ実技以外にどのようなものが求められているのかを、現場からの聞き取りなどによって改めて把握し、保育科の次年度の選考方法を改善していくことが必要である。

[区分 基準Ⅱ-A-5 学生の卒業後評価への取り組みを行っている。]

基準Ⅱ-A-5 の自己点検・評価

(a) 現状

進路・就職委員会では、卒業生の進路先からの評価を聴取するために、就職先評価アンケート調査を行い、卒業後評価として活用している。平成 22 年度と平成 25 年度のアンケート調査では、それぞれ前年度の卒業生の進路先にアンケート用紙を送付し、返信された回答を分析して卒業後評価とした。直近の平成 25 年度アンケート調査では、前年度卒業生の就職先 103 事業所（生活文化専攻 30、食物栄養専攻 25、保育科 48）に対して、「勤務状況」、「指示事項に対する対応」、「技術・技能面」などについての選択式・記述式アンケート調査を依頼し、回答を回収した。回収率は 84.5%（各 67.7%、73.1%、87.0%）であり、各科・専攻のアンケート結果と評価は次の通りであった。

また、各科・専攻において次のような評価傾向がわかった。

保育科 : 勤務状況をはじめ全般にわたり比較的高い評価を得ているが、ピアノ演奏技術が現場の期待に応えられていない様子がうかがえる。

生活文化専攻 : 比較的高い評価を得ている中で、特に、勤務状況、指示への対応、パソコン技能の評価が優れている。

食物栄養専攻 : 勤務状況と積極性が比較的评价が高い一方、技術・専門性や工夫意欲・研究態度での評価が劣っている。

項目	評価	← 優れている → 劣っている →					平均 評価点
		5	4	3	2	1	
勤務状況		42.6%	31.9%	21.3%	0.0%	4.3%	4.1
業務指示事項に対する対応		21.3%	31.9%	31.9%	12.8%	2.1%	3.6
ピアノ演奏の技術		17.0%	25.5%	36.2%	10.6%	8.5%	3.3
読み聞かせについて		10.6%	44.7%	38.3%	4.3%	2.1%	3.6
子供とのふれあい		14.9%	46.8%	36.2%	0.0%	2.1%	3.7
マナー・常識度		23.4%	34.0%	31.9%	8.5%	2.1%	3.7
評価点の総平均							3.67

＜生活文化専攻:評価項目と回答率(%)＞							
項目	評価	←優れている 劣っている→					平均 評価点
		5	4	3	2	1	
勤務状況		52.4%	19.0%	23.8%	0.0%	4.8%	4.1
業務指示事項に対する対応		28.6%	28.6%	33.3%	4.8%	4.8%	3.7
パソコンの技能		23.8%	38.1%	28.6%	4.8%	4.8%	3.7
仕事への積極性		19.0%	33.3%	33.3%	9.5%	4.8%	3.5
職場での協調性		38.1%	23.8%	14.3%	14.3%	9.5%	3.6
マナー・常識度		19.0%	38.1%	23.8%	9.5%	9.5%	3.5
評価点の総平均						3.68	

＜食物栄養専攻:評価項目と回答率(%)＞							
項目	評価	←優れている 劣っている→					平均 評価点
		5	4	3	2	1	
勤務状況		15.8%	47.4%	31.6%	0.0%	5.3%	3.7
業務指示事項に対する対応		15.8%	36.8%	42.1%	0.0%	5.3%	3.6
技術・専門性について		5.3%	21.1%	52.6%	15.8%	5.3%	3.1
仕事への積極性		31.6%	26.3%	31.6%	5.3%	5.3%	3.7
工夫意欲・研究態度		15.8%	21.1%	52.6%	5.3%	5.3%	3.4
マナー・常識度		21.1%	31.6%	42.1%	0.0%	5.3%	3.6
評価点の総平均						3.52	

これ以外にも、保育科・食物栄養専攻においては、地元の幼稚園・保育所・給食委託会社・社会福祉施設などで現役学生が実習指導を受ける期間中に、本学の専任教員がそれらの実習先を巡察に訪問した際に、実習担当者から卒業生の評価を聴取している。また、実習を行わない一般就職先に対しては、学内合同企業セミナーに参加した企業の人事担当者から卒業生の動向を聴取している。

(b) 自己点検・評価を基に課題を記述する。

前回は行ったアンケート調査では、回収率は84.5%と比較的高かったが、今後もこれを維持できるように、設問や回答方式、実施の時期や送付方法などを検討する必要がある。また、実施したアンケート結果について、評価の低かった項目に対する対応策が課題である。

[テーマ 基準Ⅱ-B 学生支援]

[区分 基準Ⅱ-B-1 学科・専攻課程の学習成果の獲得に向けて教育資源を有効に活用している。]

基準Ⅱ-B-1の自己点検・評価

(a) 現状

(2) 事務職員は、学科・専攻課程の学習成果の獲得に向けて責任を果たしている。

①事務職員は、所属部署の職務を通じて学習成果を認識している。

本学の全事務職員は、全体会議等を通じて学長方針に基づく平成27年度目標を理解し、

本学の教育理念・教育目標・学習成果の理解を深めている。

- ②事務職員は、所属部署の職務を通じて学習成果の獲得に貢献している。

事務職員は、専従職務とは別に所属する各種委員会での業務を行うことで様々な角度から学生の学習成果の把握に努めることができ、学生の学習成果修得に貢献している（学務分掌）。教務職員は教務委員会での活動及び履修登録業務、授業スケジュールの管理、授業への出欠管理、補講計画、本試・追試・再試の準備、成績登録作業等の授業関係業務を通じて、学生の学習成果修得に貢献している。

- ③事務職員は、所属部署の職務を通じて学科・専攻課程の教育目的・目標の達成状況を把握している。

さらに、非常勤講師と各クラス担任・副担任間の意志疎通を仲介し、出欠管理等による学生の履修状況の把握を通して、学科・専攻課程の教育目的・目標の達成状況の把握に努めている（欠席管理簿）。学生には掲示板やホームページ等を通して授業情報等の伝達を行い、掲示の仕方にも工夫を行うなど学生の学習成果修得に努めている。庶務職員は学生窓口業務を通して、各種証明書の発行業務、奨学金制度の説明及び申請受付、通学等において事故にあった時の保険申請手続き等において、学生と直接接して指導することで、学生の学習成果修得に貢献し、入学から卒業にいたるまでの支援を行っている。保健職員は、看護師の資格を有した職員が学生・教職員の健康診断を通じて健康ケアを行い、突発的に起こる事故等への応急措置にもあたっている。様々な悩みや問題を持った学生への対応においても保健職員は、クラス担任・副担任、学生相談センターと連携した対応を行い、卒業にいたるまでの様々な支援を行っている。会計職員は、授業に必要な備品・消耗品等の購入において、適正に業者管理を行い授業運営の円滑化を図ることにより学生の学習成果修得に貢献している。設備職員は、大学の設備備品の新規・更新・修繕を行うにあたり利便性だけでなく災害時の安全性にも配慮した学生への支援を行っている。キャリアセンター職員は、就職指導や編入学指導、インターンシップ、編入学試験対策講座、TOEIC対策講座、公務員対策講座やSPI適性検査対策講座などを通じて学生の学習成果修得に貢献するとともに（学生生活のてびき、編入学試験対策講座、TOEIC対策講座、公務員対策講座、SPI適性検査対策講座）、就職内定状況を管理することにより各科専攻課程の教育目的の達成状況を把握している。図書館職員は、学生によるブックハンティング等を企画し、学生に図書に関する興味を深めたり、読書意欲の向上に努めるなど学生の学習向上のために支援を行っている。

- ④事務職員は、SD活動を通じて学生支援の職務を充実させている。

SD活動では、SD委員会を中心にSD研修会を実施するとともに、コンソーシアム和歌山SD研修会、私立短大教務担当研修会、私立短大経理事務等研修会、近畿学生相談研究会など内外部の多様な専門事務研修会にも積極的に参加し、知識・情報の修得を行い学生支援の職務充実に努めている。平成27年度の学内研修では、前期初期において、「発達障害者に対する大学側の提供する合理的配慮の考え方」について本学心理学の先生を交えて現実的な学生対応等について事務職員全員による研修を行った。また、7月には同学校法人内の中学高等学校事務職員と「建学の精神」について合同での事務職員研修を行った。

（出張報告書・SD委員会規程・職員研修規程・各事務研修出張報告書・SD委員会議事録）

- ⑤事務職員は、所属部署の職務を通じて学生に対して履修及び卒業に至る支援ができる。

事務職員全員は、毎朝事務職朝礼（水曜日は大学全体朝礼）を行い、学校行事・学生情報・各担当者の日々の業務予定等を共有することにより担当者間の相互連携が図れるよう

にし、日々の学生支援のための職務充実に努めている。

(b) 課題

限られた人数の職員で全学生の大学事務業務を行うため、一人の職員が担当する職務が広範囲かつ多岐にわたっている。多くの場合それぞれの職務を一人で担当することになるため、関係職員と共同で作業を行っていても職務の内容に関して十分な引継ぎと教育を行うことが必ずしもできていない。各職員が職務で獲得した経験やノウハウの蓄積と継続に課題が残る。

また、多様化する学生に対応するため、関連する研修会等で知識を習得しながら、担当教員との連携を深めつつ、学生支援に当たっていく必要がある。

[区分 基準Ⅱ-B-4 進路支援を行っている。]

基準Ⅱ-B-4 の自己点検・評価

(a) 現状

(1) 就職支援のための教職員の組織を整備し、活動している。

本学では、進路支援のため「進路・就職委員会」を組織し、活動している。同委員会はキャリアセンター長を委員長として2年生担任・副担任、キャリアコンサルタント有資格教員で構成され、「学生生活のてびき」に記載されている年間スケジュールに沿って、学生のキャリア教育及び就職支援、4年制大学への編入学支援、専門学校への進学支援などを行っている。毎年度初頭の委員会で、本学のPDCAサイクルに基づいた年間運営計画を作成して計画的に活動し、各委員及び教職員に対し随時報告を行っている。

(2) 就職支援室等を整備し、学生の就職支援を行っている。

「キャリアセンター」は資料閲覧室と個別相談室の2室からなる。資料閲覧室は全学生が常時自由に入室でき、キャリア教育関係資料や求人票、企業説明会情報、編入学資料などを常設展示している。部屋の中央に約20座席のテーブルを常備し、資料閲覧及び応募書類の作成、学生同士の情報交換、グループ・ガイダンスなどのスペースとして利用されている。また、学生は常設された専用のコンピュータを自由に操作でき、インターネットを利用して就職活動サイトや企業ホームページ、キャリアセンター専用ホームページの閲覧などを行い、情報収集や企業へのエントリーなどに利用している。個別相談室には専任職員と事務補助職員の2名がおり、個別の来談学生を対象にキャリアガイダンスやキャリアコンサルティング、および履歴書作成指導・筆記試験対策指導・面接指導・模擬面接などの就職指導全般を行っている。

(3) 就職のための資格取得、就職試験対策等の支援を行っている。

就職のための資格取得、就職試験対策等の支援は、学生の社会人力向上を図るべく、秘書技能検定、簿記検定等の資格取得に関する資料を常備し、個別指導を行っている。また、本学の専任教職員を講師として公務員試験対策講座、編入学試験対策講座、TOEIC対策講座、一般常識試験、適性検査、SPI・SHLテスト・Webテスト対策講座の各種講座を年間120～150時間程度実施しており、学生は無料で自由に受講できる。ただし、講座の内容や実施時期、時間数は各年度の計画により異なる。

(4) 学科・専攻ごとに卒業時の就職状況を分析・検討し、その結果を学生の就職支援に活用している。

本学では、学科・専攻ごとの就職状況や活動状況を把握し、分析・検討してその結果を学生の就職支援に活用している。就職活動の状況を把握するために2年生全員の「内定者一覧表」、「未内定者の就職活動管理表」を新年度に作成し、年間を通してほぼ毎日更新している。①就職及び進学希望者数、②内定者数（率）、③内定先企業・事業所名、④内定先都道府県・市町村、⑤職種、⑥専門資格、⑦産業分類など、カテゴリー別にデータベース化している。これらのデータを基に、月次毎の就職内定率及び未内定者数に関して過去2年間の推移状況との比較を示す表・グラフを作成し、進路・就職委員及び全教職員に定期的に報告し、情報の共有化を促進している。また、各科専攻生の就職志望者数（率）、採用内定者数（率）の年次比較シミュレーションを行いながら、具体的な内定者数の月次数値目標を定め、状況に応じた対策の立案や個々の学生に応じたきめ細やかな指導を行っている。

なお、最近3ヶ年の「就職・編入学・進学希望率」、「就職希望率」、「就職率」、「正規雇用者率」、「県内就職率」は以下の通りである。

<就職・編入学・進学志望率>

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
全科・専攻	93.3%	96.7%	95.8%

<就職志望率>

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
全科・専攻	92.2%	94.0%	95.3%

<就職率>

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
	100.0%	100.0%	100.0%
生活文化専攻	100.0%	100.0%	100.0%
食物栄養専攻	98.0%	97.0%	100.0%
全科・専攻	99.5%	99.4%	100.0%

<正規雇用者率>

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
保育科	93.4%	95.4%	91.2%
生活文化専攻	97.2%	97.7%	95.7%
食物栄養専攻	66.0%	76.5%	95.6%
全科・専攻	87.0%	86.7%	93.1%

<県内就職者率>

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
保育科	96.2%	94.8%	91.2%
生活文化専攻	91.7%	88.4%	95.7%
食物栄養専攻	90.0%	91.2%	97.8%
全科・専攻	93.8%	92.5%	93.6%

(5) 進学、留学に対する支援を行っている。

また本学では、これらの就職支援の他にも進学・編入学に対する支援を行っている。編入学を希望する学生のために、四年制大学から送付される編入学募集要項を資料閲覧室に常備し、応募書類の作成や過去の入試問題の解析、英語と小論文を中心とした編入学試験対策指導を行っている。

(b) 自己点検・評価を基に課題を記述する。

平成 27 年度に就職活動の開始時期が後ろ倒しされ、就職活動期間が短くなった。多くの学生が高い就業意識を持って入学してきている本学にとってその影響は決して小さいものではない。特に一般職への就職を主としている生活文化専攻の 4～7 月の内定率は過去 2 年間と比較し 11%～68%程度にとどまった。今年度の状況を精査に分析し、今後の対策を詳しく検討する必要がある。

[区分 基準Ⅱ-B-5 入学者受け入れの方針を受験生に対して明確に示している。]

基準Ⅱ-B-5 の自己点検・評価

(a) 現状

(1) 学生募集要項は、入学者受け入れの方針を明確に示している。

まず、学生募集要項の第 1 ページに各学科専攻のアドミッション・ポリシーを明記している。また、本学ホームページの「大学案内」に「教育三方針」という項目を設け、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを全学および各学科専攻に分けて明記している。さらに、会場ガイダンスや高校内ガイダンスに積極的に参加し、その席で高校生にアドミッション・ポリシーの説明し熟読することを促している。5 月、6 月、7 月、8 月、9 月、3 月（主に新 3 年生対象）に実施しているオープンキャンパスにおいても同様である。

(2) 受験の問い合わせなどに対して適切に対応している。

受験生からの問い合わせや詳細な説明を求められた場合に対応するため、本学ホームページに問い合わせリンクを設けると共に、専用のメールアドレスを公開している。本学ホームページの URL や専用メールアドレス、問い合わせ電話番号は、大学案内、学生募集要項、および各種広告媒体で可能な限り公開し、大学案内と学生募集要項は資料請求や会場ガイダンス、高校内ガイダンスなどで高校生に配布している。また、オープンキャンパス日程以外でも随時、学校見学や個別相談を実施する体制を整え、高校生からの要望があればいつでも対応できるようにしており、それを周知している。具体的な問い合わせがあった場合には、入試部長および入試事務室の担当者が回答している。すぐに対応できない問い合わせについては、高校生の連絡先を確認の上、折り返し連絡をする体制をとっている。

A0 入学選考をはじめとして、高校生からエントリーや出願があった場合には、その結果について本人の了解の下に必ず高校側に連絡する体制をとっている。特に高校の進路指導部との連絡を密にすることによって、受け入れ方針に沿った受験生の出願を促すことに努めている。

(3) 広報又は入試事務の体制を整備している。

入試広報および入試実施に関する事務全般は、入試事務室の募集・広報担当が対応している。

(4) 多様な選抜を公正かつ正確に実施している。

多様な入学者選抜試験を間違いなく、厳正に実施するために、試験監督要領や受験生の誘導要領、受付要領などをまとめた入試要項を入試種別ごとに作成し、全教職員に配布して周知をはかりながら運用している。これに加えて、入学試験ごとに実施計画を作成し、円滑な運営を図っている。入試要項や実施計画は入試事務室の担当者が作成・精査し、入試委員会（入試部長）が事前確認を行っている。入試の合否判定に係わる資料については、学長より委嘱を受けた判定資料作成委員が作成の上、入試委員会（入試部長）がチェックを行い、最終の合否判定資料としている。入試の合否判定については、公正な判定ができるよう学長・学科長・主任会議において素案を決定した上で、教授会で合否を審議し、決定している。

入試問題については、学長より委嘱を受けた問題作成委員が受け入れ方針に沿った内容で問題の作成にあたり、入試問題確認委員のチェックを受けて最終的に決定している。

(5) 入学手続き者に対し入学までに授業や学生生活についての情報を提供している。

(6) 入学者に対し学習、学生生活のためのオリエンテーション等を行っている。

また、合格者が入学後に備えることができるように、基礎学力および音楽基礎技能の向上と学習意欲の喚起と持続を図るため、各学科専攻が独自の課題を課す形で入学前教育を実施している。特に、保育科の合格者に対しては、合格通知書とともに、入学までに練習すべきピアノ課題を送付して、入学前の準備について情報提供を行っている。なお、奨学金や下宿など、学生生活全般に関する問い合わせについては、事務部長を中心に事務室の担当者が対応している。

(b) 自己点検・評価を基に課題を記述する

近年、携帯電話やスマートフォンの普及によって高校生の情報収集行動はインターネットのホームページのみならず、LINE や Facebook といったソーシャル・ネットワーク・サービスの利用に及んでいる。そのため、本学ホームページも現行の PC 版に加えて、携帯電話・スマートフォン版による広報の必要性が高まってきたと言える。次年度に向けて、いかに多くの高校生に適切・的確な形で受け入れ方針等を周知できるのかを検討していく予定である。

また、現在は入学後の学びや卒業後の進路等に重きを置いた情報提供がなされているが、高校生の情報ニーズを再検討し、入学後の具体的な学生生活などニーズに応じた情報を発信していく必要がある。それらを次年度の大学案内などに反映させていく予定である。

さらに、本学の建学の精神が実際にどのように学生生活において具現化しているかを中心に、学びの内容に加えて本学の独自性、特徴をより詳しくアピールしていく必要がある。そこで、次年度に向けて高校教員対象説明会やオープンキャンパスの実施内容を再検討していく予定である。

4 【基準Ⅲ 教育資源と財的資源】

[テーマ 基準Ⅲ-A 人的資源]

[区分 基準Ⅲ-A-3 学習成果を向上させるための事務組織を整備している。]

基準Ⅲ-A-3 の自己点検・評価

(a) 現状

(1) 事務組織の責任体制が明確である。

事務組織の責任体制は和歌山信愛女子短期大学組織図(Ⅲ-A-3-1)、学務分掌(I-B-3-1)及び事務部分掌(Ⅲ-A-3-2)により、それぞれの業務内容と責任体制を明確にし、事務組織および事務分掌に関する規定等を整備している。

(2) 専任事務職員は、事務をつかさどる専門的な職能を有している。

(3) 事務関係諸規程を整備している。

(4) 事務部署に事務室、情報機器、備品等を整備している。

各担当者は業務内容や目的に応じて、能力、資格、経験、専門性を備えた職員を適切に配置するなど、学生や教職員に対応できるよう体制を整えている。事務部は、会計・教務・入試広報・庶務・環境(用務)・給品・設備、図書館、キャリアセンター、保健室から成り、各業務に必要な情報機器、備品等を整備している。

(5) 防災対策、情報セキュリティ対策を講じている。

防災対策としては、災害対策委員会を中心に、「防災訓練実施要項」を定め、毎年学生を含めた全学的避難訓練を実施している。平成26年度には教職員を対象に避難器具訓練を実施し、屋内消火栓を使った放水、避難梯子による降下、救助袋による降下体験を訓練として実施し、全教職員が災害発生時に避難器具を使った対応ができるよう訓練を行っている(Ⅲ-A-3-3、Ⅲ-A-3-4、Ⅲ-A-3-5、Ⅲ-A-3-6)。また、災害発生時に必要となる緊急対応用の水・食糧等の防災キットを4号館に保管管理している。

情報セキュリティ対策としては、外部からの進入にはファイヤーウォールの構築、内部の使用パソコンにはウイルス対策ソフトのインストール等により安全性を高めている。

(6) SD活動に関する規程を整備している。

(7) 規程に基づいて、SD活動を適切に行っている。

SD活動については、SD委員会規程、職員研修規程)に基づき学生支援に向けて活動を行っている。平成26年度より事務職員全員による朝礼を実施し、学校行事・学生情報・各担当者の日々の業務予定等を共有することにより担当者間の相互連携が図れるようにし、学生支援の職務充実に努めている。

(8) 日常的に業務の見直しや事務処理の改善に努力している。

(9) 専任事務職員は、学習成果を向上させるために関係部署と連携している。

専任事務職員としての専門能力向上のための研修として、学内の信愛教育研修会、会計研修会(監査法人指導)など、外部研修については、日本私立短期大学協会、日本学生支援機構、日本私学事業団、退職金財団、文部科学省、コンソーシアム和歌山等が主催する学外研修業務にも毎年積極的に参加し、他大学の事例等を参考に業務の見直しや改善を行っている。

(b) 課題

事務職員は、内外部の研修会に参加するなど、各部署の担当者が専門的な知識・情報を得て、日常の業務改善を目指しているが、今後、さらに業務内容を見直し、職種・専門性に応じ関連部署と連携し学習成果を向上させるために、部署相互間の仕事への理解を深めていく

ことが課題である。

資料

- Ⅲ-A-3-1 和歌山信愛女子短期大学運営組織図
- I-B-3-1 学務分掌
- Ⅲ-A-3-2 事務分掌
- Ⅲ-A-3-3 防災訓練組織
- Ⅲ-A-3-4 防災訓練実施要領指揮・連絡手順等
- Ⅲ-A-3-5 避難経路（学生生活のてびき）
- Ⅲ-A-3-6 警備報告書（日鉄住金防災警備）、セコム契約書等
- Ⅲ-A-3-7 表彰状（和歌山市消防局長）

[テーマ 基準Ⅲ-B 物的資源]

[区分 基準Ⅲ-B-1 学科・専攻課程の教育課程編成・実施の方針に基づいて校地、校舎、施設設備、その他の物的資源を整備、活用している。]

基準Ⅲ-B-1 の自己点検・評価

(a) 現状

- (1) 校地の面積は短期大学設置基準の規定を充足している。
- (2) 適切な面積の運動場を有している。
- (3) 校舎の面積は短期大学設置基準の規定を充足している。

和歌山信愛女子短期大学は、校地を 74,717 m²所有しており、短期大学設置基準の規定を充足している。そのうち運動場は 10,680 m²所有し、適切な面積となっており、様々な運動が可能で、校舎の至近位置に立地している。校舎面積は、12,998 m²を所有しており、短期大学設置基準の規定を充足している（I-A-1-6）。

- (4) 校地と校舎は障がい者に対応している。

エレベーターは、1号館（6階建）に設置され、2号館（3階建）とは全階通路でつながっている。本館1階の入り口にはスロープが設置されており車イス等でエレベーター設置箇所への移動が可能になっている。障がい者用トイレを整備しているが、学校全体としては障がい者対応のキャンパスとして十分とは言えない。

- (5) 学科・専攻課程の教育課程編成・実施の方針に基づいて授業を行う講義室、演習室、実験・実習室を用意している。
- (6) 通信による教育を行う学科の場合には、添削等による指導、印刷教材等の保管・発送のための施設が整備されている。
- (7) 学科・専攻課程の教育課程編成・実施の方針に基づいて授業を行うための機器・備品を整備している。

講義室 19 室、演習室 30 室、実験実習室 12 室、情報処理学習室 2 室を用意し、各学科・専攻の授業を行うための十分な教室が整備されている。（I-A-1-6）また、講義室である 1307（視聴覚室）、1506（大講義室 1）、1604（大講義室 2）、2207（セシリアホール）には、プロジェクター及びDVD再生設備を常設し、他にも移動式のプロジェクター・DVD設備を 3 台整備し、色々な教室で視聴覚教材・パワーポイントを使った様々な授業に対応できるよう機器・備品を整備している。

- (8) 適切な面積の図書館又は学習資源センター等を有している。
(9) 図書館又は学習資源センター等の蔵書数、学術雑誌数、AV 資料数及び座席数等が十分である。

- ① 購入図書選定システムや廃棄システムが確立している。
② 図書館又は学習資源センター等に参考図書、関連図書を整備している。

図書館の総面積は 431 m²あり、本館と閲覧室に分かれ、閲覧室には児童書や絵本など保育実習や幼稚園実習などに役立つ資料を配架している。総席数は、個人ブース 4 席・閲覧室 54 席の計 58 席あり、蔵書数 60,338 冊、視聴覚 2,814 点、雑誌 80 種(年間受入種数、うち保育科 33 種・生活文化学科 37 種・寄贈 12 種)を数える。視聴覚資料(ビデオ、DVD)の受入にも積極的に取り組み、学習、読書にふさわしい環境を整えている。また、本学のみならず、地域の研究・教育活動の拠点として、和歌山地域コンソーシアム図書館(和歌山地域図書館協議会)と連携し、地域住民に対しても広く情報を提供している。(Ⅲ-B-1-1)また、本学では、図書館選書規程、図書館除籍規程を整備し、選書・除籍の仕組みを整備運用している。

- (10) 適切な面積の体育館を有している。

体育館面積は 1,072 m²あり、適切な面積を有している。体育館は、本学学生の授業、クラブ活動、行事のほか、日常的に学生が自由に使用できるように開放している。

(b) 課題

収容定員に対し、広大な敷地を有しており、人間形成の場として環境に恵まれているが、将来の発展性や学生の教育・学修のためにも、施設・設備両面においてその維持管理を継続的に検討していく必要がある。

資料

- I-A-1-6 学生生活のてびき「学校地図及び学舎平面図」
I-A-1-6 学生生活のてびき「教室等配置図」
Ⅲ-B-1-1 図書館の概要(平面図、蔵書数、学術雑誌数、AV 資料数、座席数等)

[区分 基準Ⅲ-B-2 施設設備の維持管理を適切に行っている。]

基準Ⅲ-B-2 施設設備の維持管理を適切に行っている。

(a) 現状

- (1) 固定資産管理規程、消耗品及び貯蔵品管理規程等を、財務諸規程を含め整備している。

本学の施設設備や物品の管理については、経理規程(Ⅲ-B-2-1)、経理規程施行細則(Ⅲ-B-2-2)固定資産及び物品管理規程(Ⅲ-B-2-3)を整備し、適切に行われている。

- (2) 諸規程に従い施設設備、物品(消耗品、貯蔵品等)を維持管理している。

大学の基本施設設備等の管理は、事務部が所管しており、各種法令等の遵守とともに日常点検・業者等による法令点検・保守がなされている。また、設備機能の維持保全において、これらのメンテナンスや改修等に当たる場合、不測の不具合・騒音・振動・臭気等による授業運営に支障を来さないように実施時期を計画している。

- (3) 火災・地震対策、防犯対策のための諸規則を整備している。

- (4) 火災・地震対策、防犯対策のための定期的な点検・訓練を行っている。

火災・地震等の防災対策に関しては、消防計画において自衛消防組織を整備している。ま

た、防火管理組織として各室火元責任者を配置し、日常の火災への備えとしている。学生への防災に関する情報として、学生が注意すべき事項を学生生活のてびきに掲載し注意を喚起している。毎年実施している避難訓練については、本学の消防設備点検を委託する業者の協力の下、全学生・教職員を対象とした避難訓練を実施している（Ⅲ-A-3-3）。平成26年度には、全教職員を対象に避難器具訓練を実施、実際に消火栓より放水の実施、避難梯子による降下及び救助袋を使った4Fからの降下訓練を行い、災害時に避難・消防器具がどこにあり、どうすれば装置・器具が使えるのかを全教職員で認識共有できるよう訓練を行った。

防犯対策については、学校が開門中は警備員が唯一の学校出入口の正門に常駐し、外部からの入場者の確認を行っている。閉門中はセコムによるセキュリティーサービスを利用し、建物への侵入者を感知した場合は、サービス業者が本学に駆けつけ対応報告を行っている。また、平成26年度からは学生の下校時安全対策として、路線バスを運営している和歌山バス株式会社の協力により夕方時、学生の費用負担が伴わない方式での本学敷地内バス停から最寄駅までのバス運行サービスを行い、通学上での安全確保に努めている。（Ⅲ-B-2-4）

(5) コンピュータシステムのセキュリティ対策を行っている。

コンピュータシステムのセキュリティ対策は、不正アクセス・コンピュータウイルス等について最善の対策が取れるよう配慮している。（Ⅲ-B-2-5）

(6) 省エネルギー・省資源対策、その他地球環境保全の配慮がなされている。

省エネルギー対策として、学内教室の空調機の基本設定を夏期28℃、冬期18℃に設定している。基本設定温度での授業運営に支障が出る場合は、教室ごとの適正温度を検討の上学長の許可を得て変更を行っている。使用していない教室・会議室等のエアコンの電源をこまめに切る。日中の照明の間引き点灯等の取り組みにより電力使用量の削減を図っている。また、事務室内にデマンド監視制御装置を設置し、突発的な電力使用への対応を行い、日常的に省エネ意識の向上に努めている。

(b) 課題

火災・地震対策、防犯対策については、意識を配るべき範囲が年々広がっていることを踏まえると対策に完了がないことがわかる。

特に女子短期大学という特性を考えると、防犯上において学生の下校時の安全には、より配慮した実際的な対策を行っていく必要がある。

資料

- Ⅲ-B-2-1 経理規程
- Ⅲ-B-2-2 経理規程施行細則
- Ⅲ-B-2-3 固定資産及び物品管理規程
- Ⅲ-A-3-3 防災訓練組織 防災訓練実施要領指揮・連絡手順等
- Ⅲ-B-2-4 確認書（和歌山バス株式会社）
- Ⅲ-B-2-5 契約書等
- Ⅲ-B-2-6 電気量管理装置

5 学生生活調査

調査結果のまとめと考察

問1 あなたは、学生生活の目的を主として何においてきましたか。

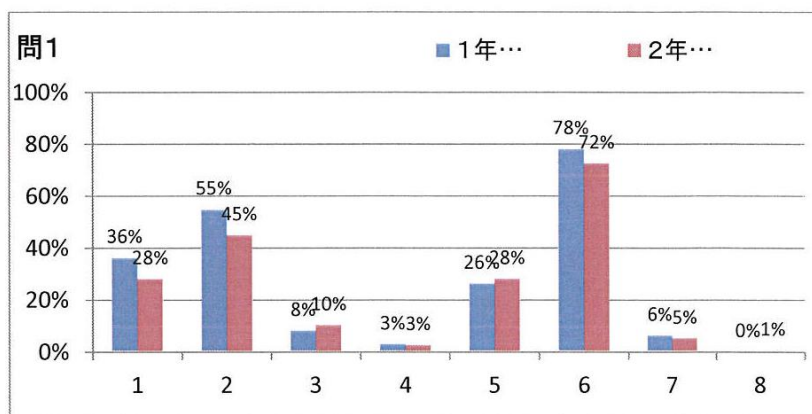
全体として、「資格を取り就職に役立てる」が75.4%と最も多く、ついで「専門的な知識や高度の技術を習得する」が50.0%と高かった。一方、「学問研究を通じて真理を探究する」、「目的は特に意識していなかった」、「真の友人を得る」が10%以下と少なかった。これは、学生が専門的な知識や技術を身につけ、資格の取得や就職等の将来への備えを主な目的にしており、幅広い知識・技術の習得や友人関係を深める意識は弱いことが示唆された。

2014年卒業生の1年次と2年次（卒業時）の2年間での推移をみると、先の全体で多かった「専門的な知識や高度の技術を習得する」と「資格を取り就職に役立てる」、さらに「豊かな教養を身に付け人格を高める」がいずれも5%以上の低下がみられた。この結果は、2年生が卒業時の調査のため、すでに就職が決定しており、現実的な判断していると同時に、学生生活への不満の一端を示しており、今後の改善が望まれる。

問1 あなたは、学生生活の目的を主として何においてきましたか。
(複数回答可)

1. 豊かな教養を身に付け人格を高める
2. 専門的な知識や高度の技術を習得する
3. 真の友人を得る
4. 学問研究を通じて真理を探究する
5. 学生生活を通じて青春をエンジョイする
6. 資格を取り就職に役立てる
7. 目的は特に意識していなかった
8. その他

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
76	55	131	36.2%	28.1%	32.3%
115	88	203	54.8%	44.9%	50.0%
17	20	37	8.1%	10.2%	9.1%
6	5	11	2.9%	2.6%	2.7%
55	55	110	26.2%	28.1%	27.1%
164	142	306	78.1%	72.4%	75.4%
13	10	23	6.2%	5.1%	5.7%
0	1	1	0.0%	0.5%	0.2%



問2 あなたは、以下の活動のどれに力を注いでいますか(いましたか)

全体として、「授業に関する勉強」(52.7%)が唯一50%を上回り、「友達との交際」と「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」が30%を超えていた。一方、「サークル・クラブ・部活動」、「授業とは関係ない勉強」、「ボランティア活動」はいずれも10%を下回った。これは、本学での学生生活の大部分が授業を中心とした学習と交流に割かれ、それ以外のサークル・クラブ・部活動やボランティア活動は低調であり、資格取得のための学修が多く、自宅からの通学に時間を要する等、時間的な制約が大きいと思われる。

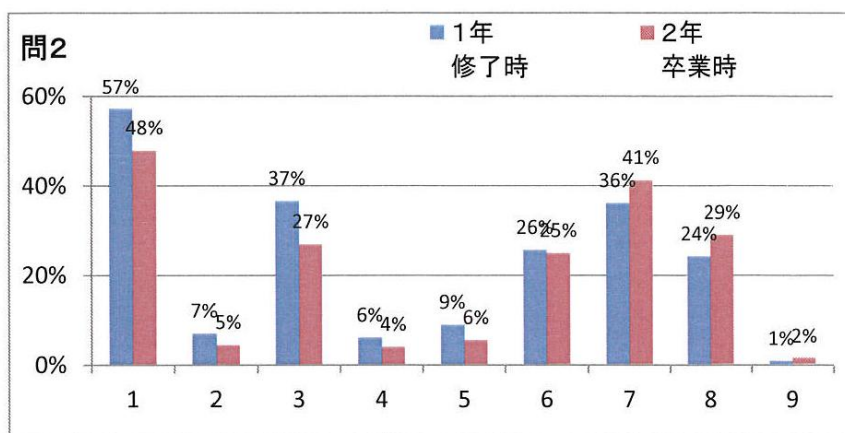
2年間の推移をみると、「友達との交際」と「趣味」が上昇(5%)したのに対して、「授業に

関する勉強」と「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」に低下(約10%)がみられた。卒業時点の学生の受け止めとして、授業よりも交友や趣味の方が多くなる傾向がみられた。

問2 あなたは、以下の活動のどれに力を注いでいますか(いましたか)(複数回答可)

1. 授業に関する勉強
2. 授業とは関係ない勉強
3. 実習やインターンシップ等、職場での就業体験
4. サークル・クラブ・部活動
5. ボランティア活動
6. アルバイト
7. 友達との交際
8. 趣味
9. その他

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
120	94	214	57.1%	48.0%	52.7%
15	9	24	7.1%	4.6%	5.9%
77	53	130	36.7%	27.0%	32.0%
13	8	21	6.2%	4.1%	5.2%
19	11	30	9.0%	5.6%	7.4%
54	49	103	25.7%	25.0%	25.4%
76	81	157	36.2%	41.3%	38.7%
51	57	108	24.3%	29.1%	26.6%
2	3	5	1.0%	1.5%	1.2%



問3 あなたは、以下の家庭内での学修にどれくらい力を注いでいますか(いましたか)

全体として、予習、復習とも「1時間以内」が大部分(85%以上)を占め、「1～2時間」と「それ以上」が少なかった。課題では、「1～2時間」(34.8%)と「それ以上」(21.2%)の増加がみられ、授業以外の家庭内での学修の多くは課題に費やされていると思われる。

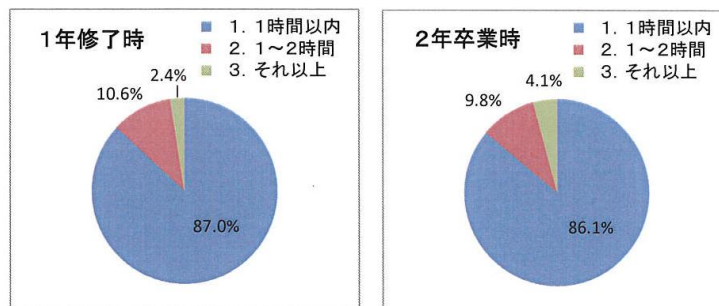
2年間の推移では、予習、復習には変化がみられなかったが、課題では「1時間以内」が上昇し(20%)、「1～2時間」は低下がみられ(15%)、課題に費やす時間が減少し、「それ以上」には差は少なかった。

問3 あなたは、以下の家庭内での学修にどれくらい力を注いでいますか(いましたか)

予習

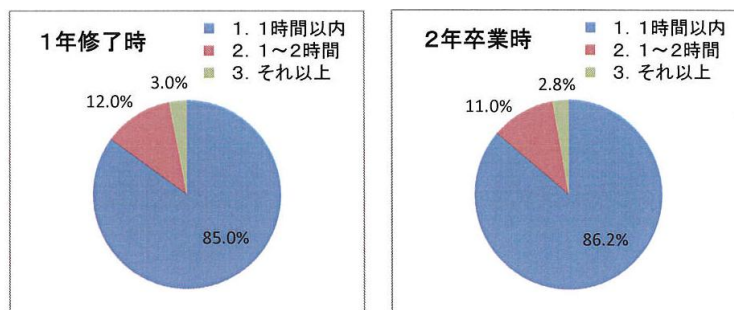
1. 1時間以内
2. 1～2時間
3. それ以上

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
180	167	347	87.0%	86.1%	86.5%
22	19	41	10.6%	9.8%	10.2%
5	8	13	2.4%	4.1%	3.2%



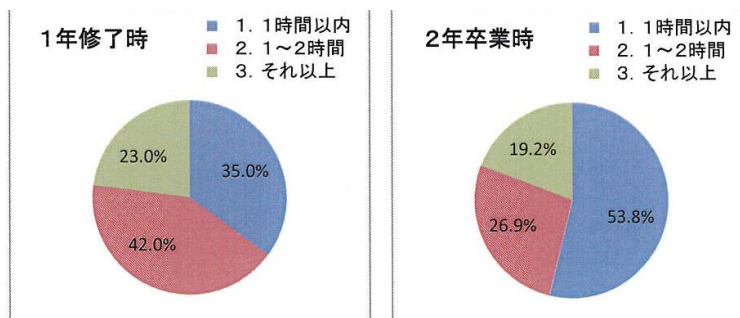
1. 1時間以内
2. 1～2時間
3. それ以上

年度数(人)			割合		
1年修了時	2年卒業時	合計	1年修了時	2年卒業時	合計
170	156	326	85.0%	86.2%	85.6%
24	20	44	12.0%	11.0%	11.5%
6	5	11	3.0%	2.8%	2.9%



1. 1時間以内
2. 1～2時間
3. それ以上

年度数(人)			割合		
1年修了時	2年卒業時	合計	1年修了時	2年卒業時	合計
70	98	168	35.0%	53.8%	44.0%
84	49	133	42.0%	26.9%	34.8%
46	35	81	23.0%	19.2%	21.2%



問4 授業内容・方法について以下の教育や学習支援に、あなたは満足していますか

※一般教養・基礎科目

全体として、満足度が3割台の項目には、「豊かな教養を身に付ける授業」(35.7%)と「興味が持てる授業」(29.8%)があり、「親しみやすい、尊敬できる教員」(26.8%)が続いた。一方、「私語が少なく学習環境に配慮されている授業」(5%以下)、「参加意識が持てる授業」、「和歌山地域を指向した授業内容」・「適正な成績評価」が少なかった(10%以下)。

2年間の推移では、全体で高かった「豊かな教養を身に付ける授業」と「興味が持てる授

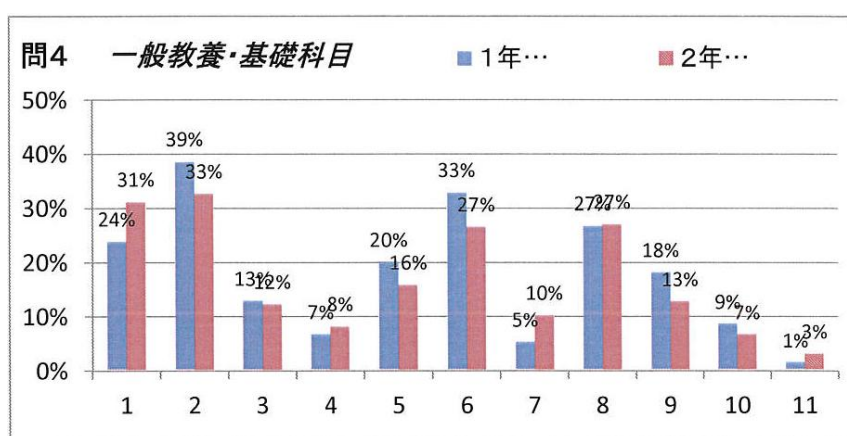
業」および「わかりやすい授業」のいずれも低下がみられた（5%）。

問4 授業内容・方法について以下の教育や学習支援に、あなたは満足していますか(複数回答可)

※一般教養・基礎科目

1. 選択できる授業の多様性
2. 豊かな教養を身に付ける授業
3. 授業方法に工夫がある授業
4. 参加意識が持てる授業
5. わかりやすい授業
6. 興味が持てる授業
7. 和歌山地域を指向した授業内容
8. 親しみやすい、尊敬できる教員
9. 熱心な指導をする教員
10. 適正な成績評価
11. 私語が少なく学習環境に配慮されている授業

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
50	61	111	23.8%	31.1%	27.3%
81	64	145	38.6%	32.7%	35.7%
27	24	51	12.9%	12.2%	12.6%
14	16	30	6.7%	8.2%	7.4%
42	31	73	20.0%	15.8%	18.0%
69	52	121	32.9%	26.5%	29.8%
11	20	31	5.2%	10.2%	7.6%
56	53	109	26.7%	27.0%	26.8%
38	25	63	18.1%	12.8%	15.5%
18	13	31	8.6%	6.6%	7.6%
3	6	9	1.4%	3.1%	2.2%



※専門科目

全体として、半数以上の学生が満足感を得ている項目は「専門的知識や技術を身に付ける授業」(48.5%)のみであり、「実践(職業)で役立つ実学重視の授業」(36.0%)が続いた。一方、先の一般教養・基礎科目と同様に、「私語が少なく学習環境に配慮されている授業」、「和歌山地域を指向した授業内容」、「適正な成績評価」、「授業方法に工夫がある授業」、「参加意識が持てる授業」に満足している学生は少なかった。

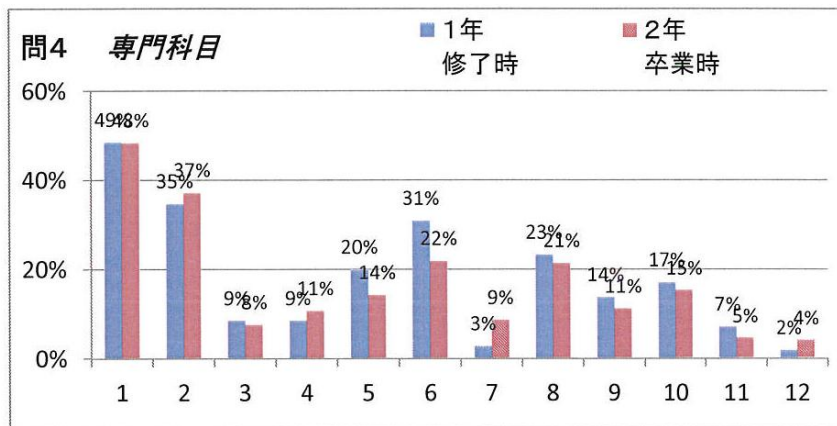
この結果から、学生は、専門的知識や技術や実学重視の授業に満足している一方、授業方法や授業中の私語、成績評価などに多くの不満を感じており、授業や成績評価については、授業担当者の一層の改善が必要と思われる。

2年間の推移では、「興味が持てる授業」と「わかりやすい授業」に5%以上の低下がみられ、先の一般教養・基礎科目と同様の結果となり、授業の内容の見直しが急がれる。

※専門科目

1. 専門的知識や技術を身に付ける授業
2. 実践(職業)で役立つ実学重視の授業
3. 授業方法に工夫がある授業
4. 参加意識が持てる授業
5. わかりやすい授業
6. 興味が持てる授業
7. 和歌山地域を指向した授業内容
8. 親しみやすい、尊敬できる教員
9. 熱心な指導をする教員
10. 学外体験(実習やインターンシップ)の機会
11. 適正な成績評価
12. 私語が少なく学習環境に配慮されている授業

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
102	95	197	48.6%	48.5%	48.5%
73	73	146	34.8%	37.2%	36.0%
18	15	33	8.6%	7.7%	8.1%
18	21	39	8.6%	10.7%	9.6%
42	28	70	20.0%	14.3%	17.2%
65	43	108	31.0%	21.9%	26.6%
6	17	23	2.9%	8.7%	5.7%
49	42	91	23.3%	21.4%	22.4%
29	22	51	13.8%	11.2%	12.6%
36	30	66	17.1%	15.3%	16.3%
15	9	24	7.1%	4.6%	5.9%
4	8	12	1.9%	4.1%	3.0%



問5 教員の指導について以下の教育や学習支援に、あなたは満足していますか

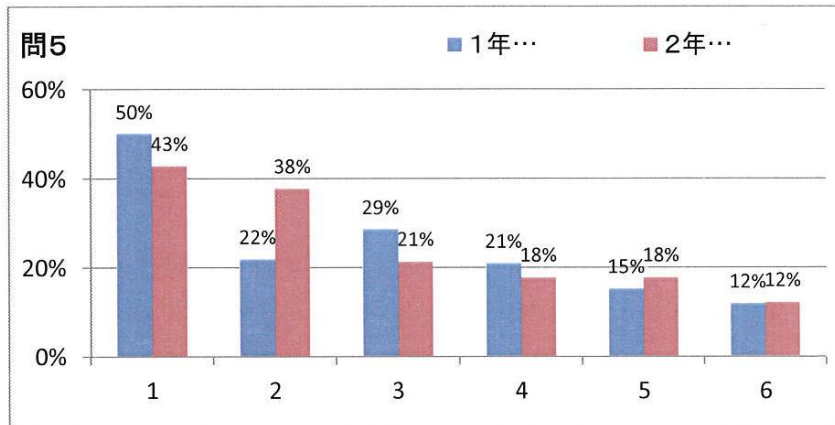
全体として、半数以上の学生が満足感を得ている項目は「科目履修に関する助言や指導」(48.5%)のみであり、3割程度で「就職や編入学など進路選択の励まし」が続いたが、授業や就職関連以外の「精神的ケアや励まし」や「授業以外で教員と交流する機会」に満足している学生は少なかった。学習に関する支援や学生支援、授業を含めた教員との交流の機会を増やすなどにより満足度を上げることが必要であろう。

2年間の推移では、「就職や編入学など進路選択の励まし」に大きな上昇(16%)がみられたが、「科目履修に関する助言や指導」と「学習スキルを向上するための手助け」に低下(7%)がみられた。これは、1年次と2年次で教員の指導に関して学生の求める内容が異なることを示唆し、今後、それぞれに対応した教員の指導が必要であろう。

問5 教員の指導について以下の教育や学習支援に、あなたは満足していますか(複数回答可)

1. 科目履修に関する助言や指導
2. 就職や編入学など進路選択の励まし
3. 学習スキルを向上するための手助け
4. 教員の専門分野に触れる機会
5. 精神的なケアや励まし
6. 授業以外で教員と交流する機会

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
105	84	189	50.0%	42.9%	46.6%
46	74	120	21.9%	37.8%	29.6%
60	42	102	28.6%	21.4%	25.1%
44	35	79	21.0%	17.9%	19.5%
32	35	67	15.2%	17.9%	16.5%
25	24	49	11.9%	12.2%	12.1%



問6 学生生活のサポート体制について以下の教育や学習支援に、あなたは満足していますか

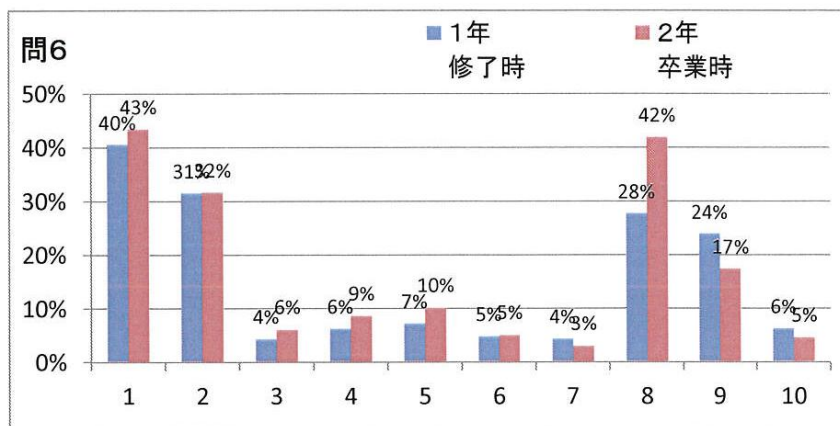
全体として、教育や学習支援で満足度が比較的高いのは「担任による支援」(41.9%)であり、「進路・就職支援の体制」(34.5%)、「所属学科の教員の支援」(31.5%)が続いた。一方、所属学科以外の教員、事務職員、保健室、学生相談室などの支援はいずれも10%以下と低かった。これは、本学が担任制度によりクラス運営が行われており、資格に関わる専門科目が学科専攻で大きく異なることを反映している。

2年間の推移では、「進路・就職支援の体制」が10%以上の大きな上昇がみられ、2年次での学生の関心の中心が進路・就職であることを示唆した。一方、「学校行事やイベント等を通じた交流の機会」に低下がみられ、学習以外の学校行事やイベント等が少ないことが一要因であろう。

問6 学生生活のサポート体制について以下の教育や学習支援に、あなたは満足していますか(複数回答可)

1. 担任による支援
2. 所属学科の教員の支援
3. 所属学科以外の教員の支援
4. 事務職員の支援
5. 学生相談室による支援
6. 保健室による支援(健康管理を含む)
7. 部活・サークル・学友会等、学生活動を支援する体
8. 進路・就職支援の体制
9. 学校行事やイベント等を通じた交流の機会
10. アルバイトや奨学金に関する情報の提供

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
85	85	170	40.5%	43.4%	41.9%
66	62	128	31.4%	31.6%	31.5%
9	12	21	4.3%	6.1%	5.2%
13	17	30	6.2%	8.7%	7.4%
15	20	35	7.1%	10.2%	8.6%
10	10	20	4.8%	5.1%	4.9%
9	6	15	4.3%	3.1%	3.7%
58	82	140	27.6%	41.8%	34.5%
50	34	84	23.8%	17.3%	20.7%
13	9	22	6.2%	4.6%	5.4%



問7 以下の施設に、あなたは満足していますか

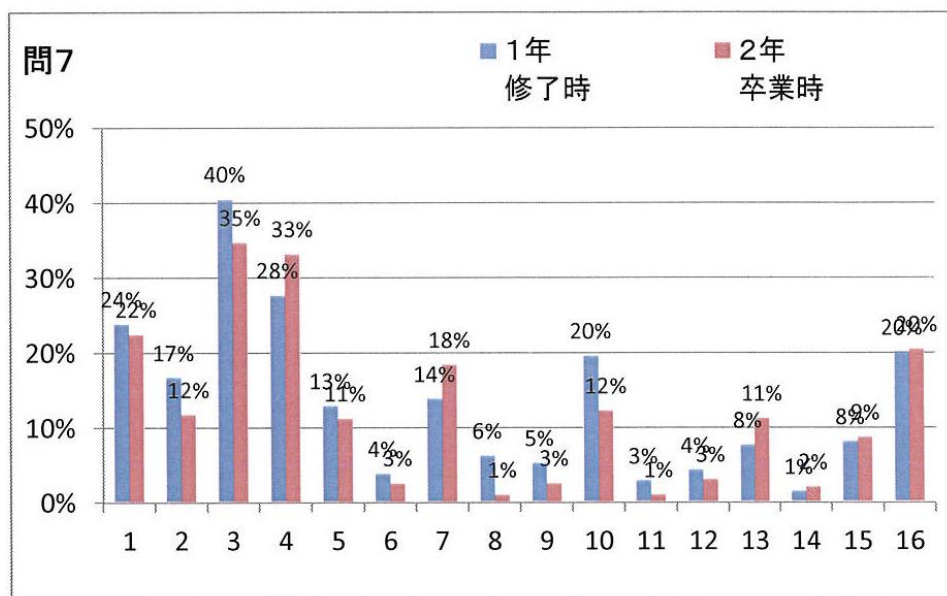
全体として、施設設備の満足度は「図書館」と「コンピュータ設備」が30%以上と比較的高かったが、一方、「廊下・階段・エレベータ」、「建物の出入り口」、「運動設備」、「駐輪場」、「課外活動設備」の設備や「バリアフリー」が5%未満と低く、学生にとって比較的身近な施設設備に不満を抱いていることを示した。

2年間の推移では、「コンピュータ設備」や学習以外の使用頻度の高い「休憩設備(学生ホールなど)」と「飲食設備」にわずかな上昇がみられたが、身近な「図書館」、「教室環境」、「ロッカールーム・トイレなど」、「運動設備(体育館・グラウンドなど)」に低下がみられた。多くの施設設備の満足度が低いことと2年次に教室環境などに低下がみられたことは、今後、施設設備の改善を図り学生の満足度を上げることが必要であろう。

問7 以下の施設に、あなたは満足していますか(複数回答可)

1. 建物・教室
2. 教室環境
3. 図書館
4. コンピュータ設備
5. 演習・実験・実習室
6. 廊下・階段・エレベータ
7. 休憩設備(学生ホールなど)
8. 運動設備(体育館・グラウンドなど)
9. 課外活動設備
10. ロッカー・トイレなど
11. 建物の出入り口
12. 駐輪場
13. 飲食設備
14. バリアフリー
15. 大学の開門・閉門時間
16. 大学の治安・安全性

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
50	44	94	23.8%	22.4%	23.2%
35	23	58	16.7%	11.7%	14.3%
85	68	153	40.5%	34.7%	37.7%
58	65	123	27.6%	33.2%	30.3%
27	22	49	12.9%	11.2%	12.1%
8	5	13	3.8%	2.6%	3.2%
29	36	65	13.8%	18.4%	16.0%
13	2	15	6.2%	1.0%	3.7%
11	5	16	5.2%	2.6%	3.9%
41	24	65	19.5%	12.2%	16.0%
6	2	8	2.9%	1.0%	2.0%
9	6	15	4.3%	3.1%	3.7%
16	22	38	7.6%	11.2%	9.4%
3	4	7	1.4%	2.0%	1.7%
17	17	34	8.1%	8.7%	8.4%
42	40	82	20.0%	20.4%	20.2%



問8 以下の知識・意欲・態度は在学中にどのように変化しましたか

全体として、「上達した」(3)、「変わらない」(2)、「低下した」(1)の3段階評価で、「専門的な知識や技能」が高く(2.81)、「一般的な常識や礼儀」(2.75)、「幅広い知識や教養」(2.74)、「社会人としての責任感」(2.70)が続いた。「上達した」が「専門的な知識や技能」が82.2%

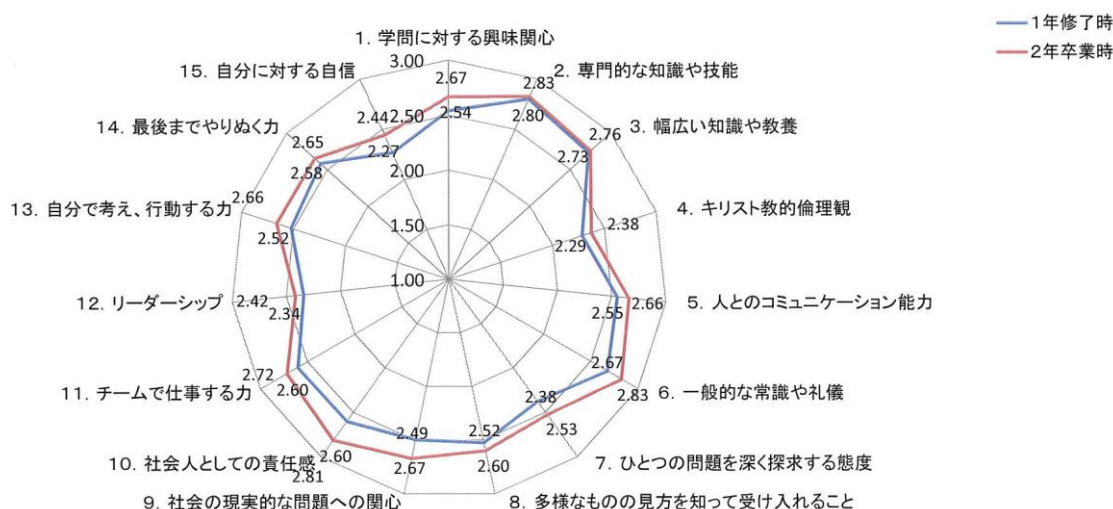
と最も高く、「一般的な常識や礼儀」や「幅広い知識や教養」が70%以上と高かったことは、専門教育だけでなく教養教育についても学生が「上達した」と実感している。一方、「キリスト教的倫理観」、「自分に対する自信」、「リーダーシップ」が相対的に低く(2.4未満)、これらの項目では、いずれも「変わらない」が「上達した」を上回り、「低下した」が5%を超えており、「上達した」が高くなるように改善していく必要がある。

2年間の推移では、「上達した」では、「社会人としての責任感」が30%以上増加し、「社会の現実的な問題への関心」、「ひとつの問題を深く探求する態度」、「一般的な常識や礼儀」の順に続き、顕著な低下はみられなかった。これは、社会人として一歩手前の卒業時の心構えがあらわれているのであろう。

問8 以下の知識・意欲・態度は在学中にどのように変化しましたか

1. 学問に対する興味関心
2. 専門的な知識や技能
3. 幅広い知識や教養
4. キリスト教的倫理観
5. 人とのコミュニケーション能力
6. 一般的な常識や礼儀
7. ひとつの問題を深く探求する態度
8. 多様なものの見方を知って受け入れること
9. 社会の現実的な問題への関心
10. 社会人としての責任感
11. チームで仕事する力
12. リーダーシップ
13. 自分で考え、行動する力
14. 最後までやりぬく力
15. 自分に対する自信

年度数(人)			年度数(人)			年度数(人)			割合			割合			割合		
1年修了時			2年卒業時			合計			1年修了時			2年卒業時			合計		
上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した
122	79	9	133	59	3	255	138	12	58.1%	37.6%	4.3%	68.2%	30.3%	1.5%	63.0%	34.1%	3.0%
168	40	1	164	28	3	332	68	4	80.4%	19.1%	0.5%	84.1%	14.4%	1.5%	82.2%	16.8%	1.0%
152	55	1	151	42	3	303	97	4	73.1%	26.4%	0.5%	77.0%	21.4%	1.5%	75.0%	24.0%	1.0%
71	127	11	83	101	10	154	228	21	34.0%	60.8%	5.3%	42.8%	52.1%	5.2%	38.2%	56.6%	5.2%
118	90	2	135	54	6	253	144	8	56.2%	42.9%	1.0%	69.2%	27.7%	3.1%	62.5%	35.6%	2.0%
143	64	2	165	26	4	308	90	6	68.4%	30.6%	1.0%	84.6%	13.3%	2.1%	76.2%	22.3%	1.5%
81	127	2	106	86	3	187	213	5	38.6%	60.5%	1.0%	54.4%	44.1%	1.5%	46.2%	52.6%	1.2%
109	98	1	121	68	5	230	166	6	52.4%	47.1%	0.5%	62.4%	35.1%	2.6%	57.2%	41.3%	1.5%
103	103	1	130	57	3	233	160	4	49.8%	49.8%	0.5%	68.4%	30.0%	1.6%	58.7%	40.3%	1.0%
124	83	0	157	30	3	281	113	3	59.9%	40.1%	0.0%	82.6%	15.8%	1.6%	70.8%	28.5%	0.8%
130	72	5	140	46	4	270	118	9	62.8%	34.8%	2.4%	73.7%	24.2%	2.1%	68.0%	29.7%	2.3%
74	131	3	85	99	6	159	230	9	35.6%	63.0%	1.4%	44.7%	52.1%	3.2%	39.9%	57.8%	2.3%
109	96	1	131	54	5	240	150	6	52.9%	46.6%	0.5%	68.9%	28.4%	2.6%	60.6%	37.9%	1.5%
121	84	1	130	54	6	251	138	7	58.7%	40.8%	0.5%	68.4%	28.4%	3.2%	63.4%	34.8%	1.8%
71	120	16	92	90	8	163	210	24	34.3%	58.0%	7.7%	48.4%	47.4%	4.2%	41.1%	52.9%	6.0%



問9 学習能力は、在学中にどのように変化しましたか

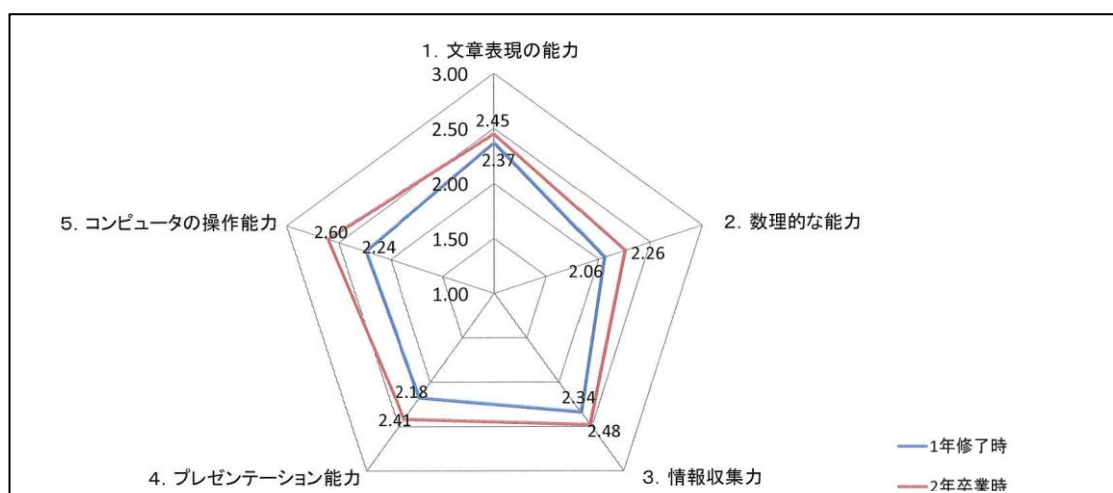
全体として、いずれの学習能力とも「変わらない」が「上達した」を上回り、3段階評価でも、いずれの学習能力とも2.5を下回り、特に、「数理的な能力」が低かった(2.15)。これらの学習能力の自己評価は、学生自身が明確な認識に至っていないことが明らかであり、「上達した」となるように改善していく必要がある。

2年間の推移では、「上達した」では、「コンピュータの操作能力」が大きく上昇し(61.3%)、「プレゼンテーション能力」も50%を上回り、情報処理や卒業研究などのカリキュラム内容が大きく反映している。

問9 学習能力は、在学中にどのように変化しましたか

1. 文章表現の能力
2. 数理的な能力
3. 情報収集力
4. プレゼンテーション能力
5. コンピュータの操作能力

年度数(人)			年度数(人)			年度数(人)			割合			割合			割合		
1年修了時			2年卒業時			合計			1年修了時			2年卒業時			合計		
上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した	上達した	変わらない	低下した
81	123	4	95	91	8	176	214	12	38.9%	59.1%	1.9%	49.0%	46.9%	4.1%	43.8%	53.2%	3.0%
30	161	18	63	117	13	93	278	31	14.4%	77.0%	8.6%	32.6%	60.6%	6.7%	23.1%	69.2%	7.7%
75	128	5	98	89	6	173	217	11	36.1%	61.5%	2.4%	50.8%	46.1%	3.1%	43.1%	54.1%	2.7%
42	156	6	79	105	2	121	261	8	20.6%	76.5%	2.9%	42.5%	56.5%	1.1%	31.0%	66.9%	2.1%
53	147	4	114	70	2	167	217	6	26.0%	72.1%	2.0%	61.3%	37.6%	1.1%	42.8%	55.6%	1.5%



問10 あなたは短大卒業後の進路についてどう考えていますか

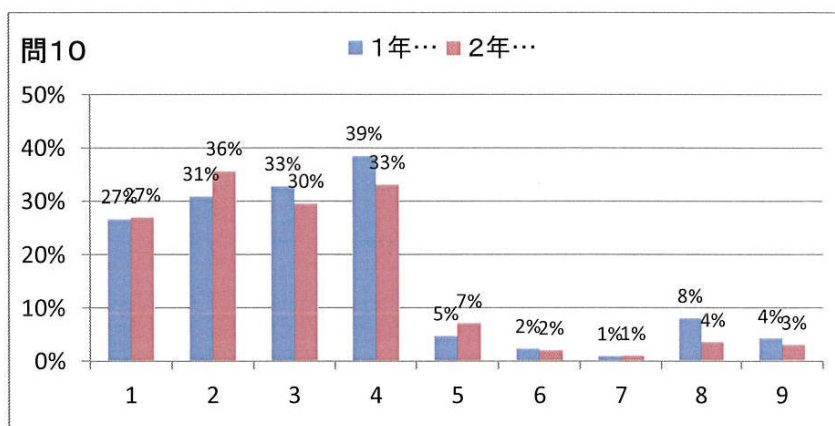
全体として、「結婚して子どもができるまで仕事をしたい」、「結婚するまで仕事をしたい」、「子どもが成長したら再就職したい」がいずれも30%で、「子どもが成長したら再就職したい」が続き、卒業後の進路に、結婚や出産の有無、子どもの成長が大きく影響することが示唆され、何らかの形で働きたい学生が多いことがうかがえる。

2年間の推移では、「結婚するまで仕事をしたい」が上昇し、「子どもが成長したら再就職したい」と「結婚して子どもができるまで仕事をしたい」の子どもに関連する項目の低下がみられた。

問10 あなたは短大卒業後の進路についてどう考えていますか(複数回答可)

1. 就職して一生仕事を続けたい
2. 結婚するまで仕事をしたい
3. 結婚して子どもができるまで仕事をしたい
4. 子どもが成長したら再就職したい
5. 2～3年腰掛的に仕事をしたい
6. 家事・家業を手伝う
7. 進学する
8. 進路はまだ決めていない
9. その他

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
56	53	109	26.7%	27.0%	26.8%
65	70	135	31.0%	35.7%	33.3%
69	58	127	32.9%	29.6%	31.3%
81	65	146	38.6%	33.2%	36.0%
10	14	24	4.8%	7.1%	5.9%
5	4	9	2.4%	2.0%	2.2%
2	2	4	1.0%	1.0%	1.0%
17	7	24	8.1%	3.6%	5.9%
9	6	15	4.3%	3.1%	3.7%



問11 全体評価

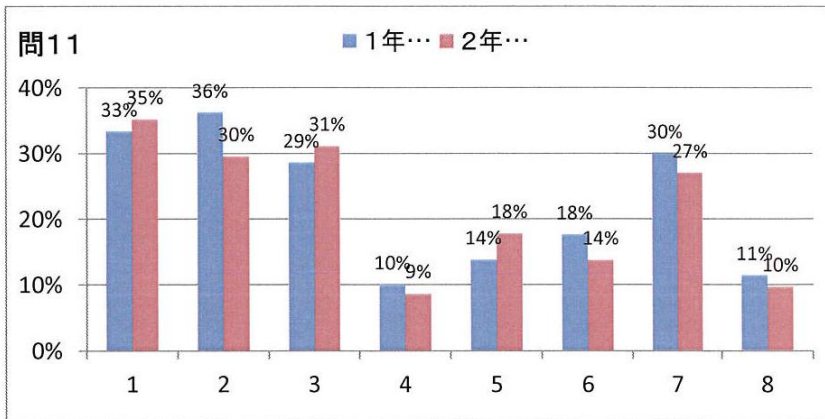
全体として、「全般的に授業に満足(一般教養科目、専門科目)」、「全般的に学生生活に満足」、「知識面・人間性において成長した」が3割台と比較的高かったが、一方、「全般的に施設・設備に満足」と「本学への進学を後輩に勧めたい」が10%と低かった。授業や学生生活は良い評価に対して、施設・設備への不満が認められた。

2年間の推移では、「全般的に短大に満足」が上昇し、「全般的に授業に満足(専門科目)」と「全般的に所属学科・専攻に満足」が低下したことは、資格を取得して専門就職を目指している本学の教育にとって、大ききな課題であろう。

問11 全体評価(複数回答可)

1. 全般的に授業に満足(一般教養科目)
2. 全般的に授業に満足(専門科目)
3. 全般的に学生生活に満足
4. 全般的に施設・設備に満足
5. 全般的に短大に満足
6. 全般的に所属学科・専攻に満足
7. 知識面・人間性において成長した
8. 本学への進学を後輩に勧めたい

年度数(人)			割合		
1年 修了時	2年 卒業時	合計	1年 修了時	2年 卒業時	合計
70	69	139	33.3%	35.2%	34.2%
76	58	134	36.2%	29.6%	33.0%
60	61	121	28.6%	31.1%	29.8%
21	17	38	10.0%	8.7%	9.4%
29	35	64	13.8%	17.9%	15.8%
37	27	64	17.6%	13.8%	15.8%
63	53	116	30.0%	27.0%	28.6%
24	19	43	11.4%	9.7%	10.6%



平成 27 年度 和歌山信愛女子短期大学

自己点検・評価報告書

(平成 28 年 1 月)

発行：和歌山信愛女子短期大学
〒 640-0341 和歌山市相坂 702 番 2
TEL 073-479-3330